

MEETING REPORT

American Association of Immunologistsに参加して

免疫学研究部

緒方 憲久

6月初めにLouisiana州 New Orleansで開催されたAAI (American Association of Immunologists) meetingに参加しました。今回は、ASBMB (American Society for Biochemistry and Molecular Biology) およびASIP (American Society for Investigative Pathology) とのjoint meetingという形でわれ6,000人を越える研究者が集まり大規模なものでした。

New Orleansは御存知のようにミシシッピー川の河口に位置するJazzで有名な都市です。実際、会場近くの公園では昼間からJazzの演奏がおこなわれていたりしていました。気候は夕方には時折スコールがありましたが、話に聞くほど蒸し暑く感じられず、比較的過ごしやすいものでした。

学会はErnest N. Morial Convention Centerをmain会場として行われ、シンポジウムが午前と午後があり、その間にポスター発表が行われるという形式でした。3つの学会の演題数は



高津教授とミシシッピー川を背景に。

3,000を超え、その内容も多岐に渡り大学院生が中心となり発表を行っているようでした。参加者はいずれの学会にも自由に出入りできるようになっていて、各分野の最新の情報を得ることができるようになっていました。当研究部からは安江先生がCD38を介したB細胞の活性化機構について、私がヒトIL-5受容体を介したシグナル伝達機構についてのポスター発表を行いました。ともに、多くの研究者が質問に來られ有意義な議論ができ、実りの多

いものでした。また、夜はフレンチクウォーターのバーボン通りでJazzを聞いたり食事(カキ料理)をしたり、楽しい時を過ごせました。

最後になりましたが、医科研国際交流基金の援助を頂き、本学会に参加できたことを心より感謝致します。そして、今後このような制度が存続することを希望したいと思います。

編集後記

本号は、諸般の事情で随分と発行が遅れてしまいましたが、内容的には本来の形になっていると思います。今年度からは多少内容的にも変化を持たせようと、北編集委員長を始め努力しているところですがまだ十分ではないかも知れません。

今回紹介されております分子生物学研究部は、大変インターナショナルな研究部で、実験室内での共通語が英語であると言う噂もあるようです。医科研の研究部の将来像を考える上で参考になるような気が致します。

5号館の建設も進み、医科研キャンパスも数年前とは随分と変わって参りました。医科研の組織改革も議論されております。ここ数年は、医科研ばか

りでなく、日本の医科学研究・生命科学全体が新たな変革を迎えようとしている様に思われます。このような時期に医科研の活動をなるべく理解しやすい形で紹介し皆様に理解して頂く上で、医科研NOWが多少は役立っていると自負しております。今後ともより良いものを作っていくために、読者の皆様から御意見御要望をお寄せ頂きたいと思っております。◎